

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	解 璞
論文題目	夏目漱石文学の研究—鏡の表象と「うつし」の文学
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、申請者が「早稲田大学アジア特別奨学生」という資格で来日し、文学研究科博士課程で研鑽を重ねて完成した夏目漱石に関する研究論文である。北京大学大学院修士課程時代から、申請者は夏目漱石の作品に関心を寄せ、先行研究を博捜し、新しい視点を打ち立ててきた。作品の内的構造を、「それから」では世代や性差によって分析する試みもみられたが、来日してからは、「鏡」という視点に着目、「鏡」という表象が如何に描かれ、時代と共にどのように変容したかを研究の中軸として来た。漱石作品には、小道具として「鏡」がよく登場するが、申請者はただ単なる物としての「鏡」に注意するのではなく、「鏡」を比喩的なものとして捉え、その表象に見える重層性に注目する。だから、「うつし」ということも、「映し」「顕し」「移し」などと、多様な意味合いで考えられて来るわけである。長い研究史の積み重ねのある漱石研究では、新視点の提出は大変な作業となるが、申請者はそれに挑み、多くの成果をあげたと言える。</p> <p>本論文は、「第一部 うつす文学」「第二部 うつされる文学」の二部からなる。「第一部 うつす文学」は、全六章で、作家以前の文業から、晩年の作品まで主要作品の作品研究を展開する。自己と他者、自国文学と外国文学との緊張関係による自己像の不安定さにこそ、漱石文学の端緒があると考えるのである。</p> <p>「第一章 最初期の夏目漱石文学における「顔」と「鏡」—『木屑録』と『倫敦消息』論」は、従来関係づけられていなかった初期の二作品の関係を、「顔」と「鏡」から分析し、前近代から近代へ、東洋から西洋へ、象徴から写実へという変容が、漱石の作家的出発と深いつながりがあるとする。</p> <p>「第二章 鏡と時間—夏目漱石『薙露行』論」と「第三章 「薙露」から『薙露行』へ—夏目漱石における詩と散文」の二篇は、初期の問題作『薙露行』を取り上げ、そこに「鏡」と「時間」の問題が隠されているとし、更に漱石における「詩と散文」のジャンルの融合をここに見る。西洋文学や視覚芸術の側面から論じられる作品だが、「漢詩」と「英詩」の接点という視点から考えたことは、新しい視点として注目される。</p> <p>「第四章 『草枕』の「ユートピア」と一人称—鏡としての語り手について」は、作品の丹念な読みを通して、一人称が変化する部分があることを見出し、一人称単数から一人称複数への変化が、語り手「余」の見る現実とどう関係するかが跡付けられている。語り手の位置は必ずしも確かではなく、人称の揺れからもわかるように、矛盾した二つの面を持っており、こうした「鏡」のような一人称の語り手のダイナミックな映し方に『草枕』の魅力がある、としている。短い論文だが、問題提起は鋭い。</p> <p>「第五章 『夢十夜』『第八夜』における鏡と夢—『鏡の国のアリス』との比較を通して」は、「鏡」の重層性を最もよく示す連作『夢十夜』から、とくに「第八夜」に着目し、キャロルの『鏡の国のアリス』との比較を試みた論である。「第八夜」では、現実と夢の境界があいまいになっており、真と偽、意味と無意味を判断する基準が揺れているとし、「第八夜」の「鏡」の機能にも論点を及ぼしている。</p> <p>「第六章 『門』における宗助の言語活動—参禅の意味を問い直す」は、主人公宗助が参禅体験を契機に、独りごとの閉じられた世界から、音声言語を駆使出来るようになり、自己の起源に眼を向け、言語活動を再生出来るようになったのだと論じている。参禅が、宗助が「何もしない」鏡になろうと「する」ことではないか、と考えた点は、興味深い。</p> <p>以上の作品研究は、長い研究史を踏まえつつ、新たな視点を提出しようとした冒険に満ちた論考群であり、申請者の努力が実った部分と言える。晩年の作についての論考も、今後期待される。</p>	

「第二部 うつされる文学」は、全四章で、漱石作品を最初に中国語訳した魯迅に照明を当て、漱石と魯迅の比較文学的考察を深めた部分である。

「第七章 夏目漱石文学最初の中国語訳について(一)―魯迅訳「懸物」の成立を中心に」と「第八章 夏目漱石文学最初の中国語訳について(二)―魯迅訳「懸物」の本文を中心に」は、漱石の『永日小品』の中の一編「懸物」をめぐる、興味深い考察が見られる。漱石文学の最初の翻訳が魯迅によってなされた背景を辿り、そこに時代の意味を考えている。特に「懸物」翻訳の背景には、中国の文壇における「小品」ジャンルへの関心があったことを紹介しているのは重要である。更に、魯迅の翻訳の特色を指摘し、原文の口調を尊重した魯迅の精確さを具体的に分析している。

「第九章 夏目漱石『夢十夜』と魯迅『野草』における表現不安の表現方法―「第七夜」と「死後」を中心に」は、『夢十夜』『第七夜』と魯迅の『野草』の一編「死後」の間に、夢における不安の表現方法において関連が見られるとし、しかし各文章の結末においては、向う方向のずれが見られると論じている。

「第十章 『幻影の盾』と『鑄劍』における東西古典を書き直す表現方法―夏目漱石と魯迅における自国文学と外国文学」は、漱石の『幻影の盾』と魯迅の『鑄劍』を比較しつつ、物語の空間の神秘さの処理を問題にする。

最後に「終章」が付けられ、「鏡」の表象を通して漱石文学を新たに見直して来た本論文の達成を確認している。また、漱石『永日小品』全編の中国語訳が添えられている。これまで一部は、中国語訳が存在するが、申請者の手によって新たに全訳が試みられたのである。

留学生にとって、漱石は研究の対象として非常に重い存在であるが、申請者は研究史を踏まえ、従来見逃がされていた作品や文献を跡付けつつ、漱石の問題作に一定の解釈を与えることに成功している。確かにまだ論じられていない漱石の代表作は多いが、「鏡」の視点で全体を一貫した努力は高く評価されよう。魯迅との比較も、従来の文化的・歴史的な比較ではなく、表現に即した具体性があり好感が持てる。惜しむらくは、同じように「鏡」を用いて達成を見せている芳川泰久氏の漱石論をどう乗り越えるのかが明確でない点、漱石の『文学論』の分析がもっと欲しい点、「表象」の概念が必ずしも明確でない点、「うつす」「うつされる」の関係をもっと深めてほしかった点など、申請者に期待したい点が多い。しかし、論文の日本語として、確かな日本語表現を打ち立てており、査読を経た学術論文が3点以上あり、全国的な学会での研究発表も2回こなしており、その成果は充分である。今後の漱石研究において注目される部分も見られ、更なる成果が期待される。よって、本論文が、「博士(文学)」の学位を授与するのにふさわしい論文であることを認定する。

公開審査会開催日	2014年1月25日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	中島国彦
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		高橋敏夫
審査委員	早稲田大学政治経済学術院・教授		宗像和重
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	十重田裕一
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	鳥羽耕史
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		千野拓政